

The Gaskell Society of Japan

Newsletter

No.24 (May 2012)

日本ギaskell協会ニュースレター

Elizabeth Gaskell's Letters

Jenny Uglow

When I wrote my biography *Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*, I sometimes felt like a ventriloquist rather than an author, as Gaskell's letters are so full and alive that she could almost tell her own story. They bring vividly to life the difficulty of combining a career as a novelist with an extremely busy role as a minister's wife and a mother. Few author's letters are as graphic as her explosion to her friend Tottie Fox, on Christmas Eve 1854 when she was trying desperately to finish *North and South*: 'I believe I've been as nearly dazed and crazed with this c---, d--- be h--- to it, story as can be. I've been sick of writing, and everything connected with literature or improvement of the mind; to say nothing of deep hatred to my species about whom I was obliged to write as if I loved 'em.'

A similar forcefulness marks her reaction to the reception of her early novels, especially *Mary Barton* and *Ruth*. But here – as with *The Life of Charlotte Brontë* a few years later – although one can see her distress, one can also sense her stubborn determination and her conviction that she was justified in writing as she did, and, moreover, that she knew exactly what uproar her work would cause. Her claims of shock do not ring entirely true. 'The writing of 'Mary Barton' [*sic.*] was a great pleasure to me;' she told the American critic John Seely Hart, 'and I became so deeply, sometimes painfully, interested in it, that I don't think I cared at the time of it's [*sic.*] publication what reception it met with. I was sure a great deal of it was truth'. She claimed to feel the same about *Ruth*, although her letters show how the fierce reaction hurt her, but made her aware of the novel's power, as it forced reluctant readers, she explained to Lady Kay-Shuttleworth, to 'talk and think a little on a subject which is so painful that it requires all one's bravery not to hide one's head like an ostrich and try by doing so to forget that the evil exists.'

The same word, 'truth', features in her defence of both *Ruth* and *Mary Barton*. So how 'true' are her letters? Each correspondence is different in tone. She is brisk and funny to her daughters, open and frank to her friends, solemn when writing about religion to Charles Bosanquet, or positively flirtatious in her early letters to Dickens. As she told Tottie in April 1850, when she was worried about the selfishness of buying the Plymouth Grove house when people around were in need: 'thats [*sic.*] the haunting thought to me; at least to one of my 'Mes,' for I have a great number and that's the plague. One of my mes is, I do believe, a true Christian – (only people call her socialist and communist), another of my mes is a wife and mother... Now that's my 'social' self I suppose. Then again I've another self with a full taste for beauty and convenience'. How, she asked, was she to 'reconcile all these warring members'?

The joy of her correspondence is that here she does not need to reconcile them. Her letters give an unparalleled insight into her work, but they are often an immediate response to place, personalities or problems, ranging from the trials of serial publication to difficulties with servants or frustration at William's busy timetable – 'but you might as well as St Paul's to tumble down, as entreat him to give up this piece of work'. Some of my favorite letters are those to her daughter Marianne, away at school, where amused reports of home life sit side by side with motherly advice and comments on clothes – 'Have as many and as large and varied interests as you can; but do not again give a decided opinion on a subject on which you can at present know nothing. About yr bonnet get it *large*, and trimmed with white.' The juxtaposition of serious thought with piquant detail enlivens all her correspondence, giving it the same variety and depth and charm that distinguish her great novels.

第 23 回例会レポート

日 時：6月4日（土）午後2時より
場 所：日本大学法学部本館2階第1会議室
総合司会：矢次 綾（松山大学教授）
開会の辞：日本ギaskell協会会長 多比羅眞理子
（実践女子大学非常勤講師）

研究発表：司会 木村晶子（早稲田大学教授）

1. 「*Ruth* に見る「意識」が直接与えるもの
— ヒロイン・ルースを例にして —」
大前義幸（日本大学大学院生）
2. 『*クランフォード*』における女性の自立
— その萌芽と特質 —」
前原由紀（慶應湘南藤沢中・高等部非常勤講師）

講 演：司会 多比羅眞理子（実践女子大学非常勤講師）

「19世紀 ファッションの世界に生きた人々 —E. ギaskellの表現をめぐって—」
能澤慧子（東京家政大学教授）

閉会の辞：日本ギaskell協会副会長 大野龍浩（熊本大学教授）



（撮影：大野龍浩）

初夏の日差しが眩しい6月4日（土）、第23回例会が多比羅眞理子会長の挨拶により開会した。それに続き、大前義幸氏、前原由紀氏の研究発表が、木村晶子氏の司会によって、そして、能澤慧子氏による講演が多比羅氏の司会によって行われた。

1. 「*Ruth* に見る「意識」が直接与えるもの — ヒロイン・ルースを例にして —」

大前氏は涙をキーワードにルースの心の動きを吟味することを通し、彼女自身が涙を流してその心の内を表現するだけではなく、他人に涙を流させることで、言葉によって得られる共感以上の愛情を獲得したこと、そして、涙を流すことによってルースが「堕ちた女」から「家庭の天使」へと変貌したことを論証した。涙を流すルースの姿には、幼少期に自分の望みだけの愛情を得られなかったギaskellの体験が反映されていることにも、言及した。

2. 『*クランフォード*』における女性の自立 — その萌芽と特質 —」

前原氏は、経済的に破たんしたミス・マティーがお茶を商うという職業に就いた点に着目しながら、19世紀半ばから現在に至る女性の自立について様々な角度から述べた。そして、男性に依存するのではなく、女性も自立すべきだという問題意識をギaskellが持っていたのではないかと結論した。

以上のお二人の発表に対して、問題設定や資料の提示の仕方を含め、温かくも忌憚のない意見が寄せられた。「開会の辞」の中で、多比羅会長が学会の役割の一つとして、若い会員の指導を挙げられたが、今回の研究発表は、発表者のお二人にとって今後の研究について重要な指針を得る場であり、会員全体が学会の指導的役割について再確認する場となった。

講演「19世紀 ファッションの世界に生きた人々 —E. ギaskellの表現をめぐって—」

能澤氏は『*クランフォード*』に書き込まれている年代をギaskellの記述から推定し、その前後の年代に至る服装史の流れについて概観した上で、『*クランフォード*』に登場する人物たちのファッションに対する姿勢を吟味した。

能澤氏によると、19世紀は誰もがファッションに参加できるようになると同時に、ブルジョワジーが階層化し、ファッションが階層の差別化を促す材料となった時代でもあった。『*クランフォード*』に描かれた1840年代のファッションの特徴は、目新しさが好まれたことによる流行サイクルの短縮化、大きく広がるスカートの流行、ふんだんに施された装飾、ウエストが強調されることによって身体の動きが限定される非機能性であった。さらに、当時、ファッションにおける男女差が強調されたために、異性装に反感が持たれるようになった。

過熱化するファッションがそれを身に着ける人の判断材料ともなった時代において、例えば「流行遅れのジゴット袖型の袖」が最後まで見られ、「つましくすることはいつも『上品』で、金を使うことはいつも『俗で見栄っぱり』な『クランフォード』において、ギヤスケルはファッションの世界から距離を置くことを「上品」とし、ファッションを追い求めることを「俗」と見なすことによって、「精神的平安を維持する生き方を描いている」と論じた。また、姉デボラの服を着用し、枕で作った赤ん坊を人目につくところで抱いてみせるという悪戯をしたピーターに対し、父親が怒り心頭に発した理由として、能澤氏は、ピーターがデボラの社会的名誉を傷つけたためだけではなく、女装という当時の常識では許されない行為をおこなったためではないかと指摘した。異性装に対する当時の人々の意識を示す例として、能澤氏は1851年にアメリカから起こったブルーマー・コスチュームが多大な反発を受けたことを挙げ、そのような社会の風潮を前提としてギヤスケルはピーターの一件を創造したのではないかと結論づけた。

例会は大野龍浩副会長の「閉会の辞」で締めくくられた。参加者は38名であった。

(矢次 綾)

第23回大会レポート

日 時：平成23年10月2日（日曜日）

午前10時より

会 場：江戸川大学 A8F 第1会議室

総合司会：石塚裕子（神戸大学教授）

開会の辞：日本ギヤスケル協会会長 多比羅眞理子

研究発表：司会 大嶋 浩（兵庫教育大学教授）

1. 「書く女」について書く

ー エリザベス・ギヤスケルとシャーロット・ブロンテの場合

講師 小田夕香理（福井工業大学専任講師）

2. 「ギヤスケルの雑誌・新聞記事における異国表象」

講師 志渡岡理恵（実践女子大学専任講師）

開催校挨拶：市村佑一（江戸川大学学長）

総 会：総合司会 事務局長 諸坂成利（日本大学教授）

シンポジウム：「ギヤスケル文学と手紙」

コーディネイター・講師 宇田朋子（聖徳大学短期大学部准教授）

講師 出淵敬子（日本女子大学名誉教授）

講師 大田美和（中央大学教授）

講師 江澤美月（専修大学非常勤講師）

講演：「ヴィクトリア朝のグリゼルダと反グリゼルダ」 司会 武井暁子（中京大学教授）

講師 原 英一（東京女子大学教授）

閉会の辞：日本ギヤスケル協会副会長 大野龍浩（熊本大学教授）



(撮影：大野龍浩)

10月2日（日）千葉県流山市の江戸川大学で第23回大会が開催され、40数名が参加しました。つくばエクスプレスで都心から30分あまりと時間的には思いのほか近く、さらに日曜日にもかかわらず、江戸川大学のご好意でスクールバスも運行していただきました。以下プログラムに沿って、大会を振り返ります。

まず、総合司会を仰せつかった石塚のもと、多比羅会長の開会の辞で大会は幕を開けました。研究発表とシンポジウムの内容は発表者、講演者および司会やコーディネイターからご報告いただいたものをもとに記載させていただきます。この場を借りてお礼申し上げます。

研究発表

1. 「書く女」について書くーエリザベス・ギヤスケルとシャーロット・ブロンテの場合

小田氏はギヤスケルの『シャーロット・ブロンテの生涯』とブロンテの「伝記的紹介文」を比較検討しました。両作家はヴィクトリア朝で「女性」が書くことの難しさを共有しつつも、ギヤスケルはブロンテを「女性」として描いて世間の理解を求め、ブロンテは彼女たち姉妹を「作家」として描いて男性作家同様の評価を求めたという相違があることを指摘しました。

2. 「ギヤスケルの雑誌・新聞記事における異国表象 — フランスの田舎と都会」

志渡岡氏はギヤスケルの“French Life”を当時の旅行文化のコンテクストの中で解釈することを試みました。作中の鉄道とガイドブックへの言及からギヤスケルの旅のありようを再構築するとともに、フランスを地域（田舎と都会）によってそれぞれ別の角度から眺める彼女の態度が同時代の他の雑誌記事に見られるフランスへの関心のありかたと重なっていることを指摘しました。

シンポジウム：「ギヤスケル文学と手紙」

「手紙」というアイテムに注目し、それをギヤスケルがどのように利用し、また作品に生かされているのかを検証しました。

1. 「女性と手紙の表象 — オランダとイギリスの場合」

出淵氏は映像を駆使し、17世紀半ばオランダの画家たち、とりわけフェルメール作品では、女性と手紙を画題にし、手紙を読む瞬間や返事に没頭している心の動きを覗かせていることを提起し、さらに絵の中で当時の社会背景を表象しているのはバルト海交易などによる通信手段の発達が影響していると分析しました。ネーデルランドの画家たちは女性の感情の変わり行く瞬間を風俗画で表象したが、イギリスの小説家は一世紀遅れて、『パメラ』など書簡体小説で表象し、手紙を読み書く女性が小説に登場する頻度が増したが、その背景には18世紀前半の郵便制度の改革があった点を挙げました。

2. 「Gaskell と Brontë のクリアな瞬間と手紙（文通）」

大田氏は、Gaskell と Brontë のテキストと実人生における規範に沿った瞬間と逸脱の瞬間をマッピングして、逸脱の瞬間をクリアな瞬間と呼び、時間や記憶についてのクリア理論を使えば、「結婚と女性の成長」では評価しかねる小説（例 *North and South*）や、性欲過剰、神経症とされかねないヒロインを持つ小説（例 *Villette* の Lucy）を、社会的弱者が過去や記憶の操作によってエンパワメントの機会を得る小説と読み替えることができると指摘しました。手紙を操作してクリアな瞬間（例 James Taylor への矛盾に満ちた感情）を見えなくした *The Life of Charlotte Brontë* は理想的な「女性」作家を構築したが、クリアな瞬間と手紙（文通）が見られ、この視点での研究の可能性は大きいと論じました。

3. 「Gaskell のイタリアへの関心とマンチェスター」

江澤氏は、Gaskell のイタリア統一への関心は、長い手紙の中では主にイタリアからの亡命者への言及に留まり、非常に断片的であると指摘したうえで、D. G. Rossetti がイタリアからの亡命者の第二世代であることに注目し、彼の書簡およびその周辺状況を、Gaskell の手紙の断片的情報は、手紙の受信者との共通するイタリア認識のもとに、彼女が発信したものとして一つの指向性を持つと分析しました。Gaskell のイタリア観の背景には、イタリアからの亡命者を受容し、宗教的信条を不問とする Owens College を創立させた、国際都市マンチェスターの政治性が窺えると論証しました。

4. 「もしも手紙が届かなかったら — ギヤスケル文学における手紙の効用」

宇田氏は、ギヤスケルの作品は手紙を効果的な小道具として利用していると指摘しました。手紙の文面をそのまま小説の中で見せることにより、手紙の受け取り手である作中人物だけでなく、読者も同じ情報を共有でき、中には、本来情報を伝えるはずの手紙が、書き手が故意に情報を隠蔽し、受け取り手に必要な情報を与えていないものや、受け取り手が恣意的に文面を曲解して、送り手の意図をくみ取ろうとしない場面や、第三者によって手紙が故意に隠され、本来の受け取り手に渡らないままになる場面もあると分析しました。作品で明示されている情報だけでなく、隠蔽された情報も考慮して作品を読む必要があると結論付けました。

講演：「ヴィクトリア朝のグリゼルダと反グリゼルダ」

原氏は、『デカメロン』のグリゼルダ物語では夫の理不尽な仕打ちに完全に受動のままのヒロインは現代的感覚では理解しがたいものの、一方でルネサンス期に現れた、「夫殺し」にまで走る反グリゼルダ型のヒロインは、現代の読者からはある種の共感を持たれるが、それは長い歴史の中で見れば、均衡を欠いた嗜好ではないかと指摘しました。リチャードソンのヒロインたちも、ディケンズのヒロインたちもグリゼルダ型であり、グリゼルダ型ヒロインと反グリゼルダ型ヒロインの系譜をたどることによって、ヴィクトリア朝小説の女性たちについて、より深く立体的な見方が可能になると問題提起し、ジェイン・エアの背後の「ジェイン・ショア」が、徹底的に自己否定するエスタ・サマソンの「謀叛」が、そしてルース・ヒルトンの反攻が浮かび上がると論考しました。ヴィクトリア朝の多様なグリゼルダ像を浮き彫りにしましたが、東北弁のひょうきんな朗読で聴衆を大いに沸かせ、長時間のプログラムでやや疲れ気味の聴衆も元気・活気づけられ、またその幅広い読書と深い学識にあらためて学問に眼を醒まさせられました。

研究発表後、開催校挨拶があり、江戸川大学学長市村佑一氏は日本ギヤスケル協会名誉会員小池滋先生とは鉄道研究会での後輩と、親近感を覚えられ、ギヤスケル協会のますますの発展を熱っぽく語ってくださいました。

総会は諸坂氏の司会のもと、昼休みに行われ、平成22年度会計・平成23年度予算、『ギヤスケル論集』第21号、例会・大会およびNLに関する平成24年度行事予定等が報告されました。役員の交代、および多比羅会長の任期満了まで事務局長、諸坂氏の任期期間延長が承認されました。来年度大会を初めて土曜日に開催する旨報告されました。来年度からギヤスケル作品の読書会を開催する計画が了承されました。

閉会の辞が大野副会長からあり、研究発表、シンポジウム、講演を総括し、心温まるコメントをそれぞれに添えました。若手研究者の真摯でひたむきな研究姿勢、中堅の果敢な挑戦、円熟味を増すベテランの泰然自若とした報告と、多様でバランスのとれたプログラムだったと共に、全体的に見て、文化研究に軸足が移っているのが印象的でした。

大会終了後、ほんの少し場所を移し、多比羅会長の司会、鈴江前会長の乾杯の音頭で始まった懇親会には、豪華で美味しい料理とお酒とデザートがふんだんに用意され、一日の疲れもあつという間に吹き飛びました。大会の余韻に浸りつつ、帰りを気にしながらも、和やかで楽しいひと時を過ごせたのも、ひとえに開催校の関係各位のご尽力の賜物と感謝する次第です。

(石塚裕子)

研究会（読書会）の発足につきまして

日本ギヤスケル協会会長 多比羅 眞理子

今年度より研究会として、短編・中編を中心に読書会を開催いたします。学会行事は、現在春の例会、秋の大会の二つしか開催していませんので、さらに活動を活性化の意味で、研究会の立ち上げを計画いたしました。ギヤスケル協会では創立10周年を記念して長編小説を、また20周年には短編・日記、ノンフィクションの翻訳を刊行しました。これで、ほぼギヤスケルの作品の翻訳は完成したことになります。そこで、今回、比較的研究がされていないギヤスケルの短編、中編をより深く鑑賞していきたいと考えます。正式な研究会発足を前に、トライアルで平成24年1月、3月の2度、短編「リジー・リー」の読書会を開催いたしましたことは、先にご案内した通りです。この読書会では、各自の読後感を思うままに語り合い、そこから議論が発展したり、また、新たな視点が提示されたりと、大変刺激的、かつ、楽しい意見交換の場が持てました。

できるだけ負担のない範囲で、本研究会を今後継続してまいります。翻訳でも結構ですので指定作品をお読み頂きご参加ください。奇数月の開催（第二、あるいは第三日曜日）を予定しております。本年度は以下の通り1850年代の短編、中編を取り上げます。

平成24年5月、7月 “The Well of Pen-Morfa”

9月、11月 *The Moorland Cottage*

第一回目は、5 月 13 日（日）午後 2 時から午後 4 時半ごろまで、日本大学法学部（水道橋）の 3 号館 326 教室にて開催いたします。それ以降の詳しい日時、会場につきましては、協会ホームページ、あるいは会員メールでご案内いたします。

事務局報告（平成 22 年度）

平成 22 年度 日本ギヤスケル協会会計報告

PDF 版につき省略致しました。

【平成 23 年度第 1 回役員会】

日時：平成 23 年 6 月 4 日（土）午前 11 時 30 分より、会場：日本大学法学部本館 2 階第 1 会議室、1. 入退会の件、入会：松本三枝子、志渡岡理恵、角田裕子、退会：山本街代、金丸千雪、2. 役員組織と役割分担、日本ギヤスケル協会第 12 期役員、会長：多比羅真理子、副会長：大野龍浩、事務局長：諸坂成利、幹事（第 11 期着任・第 12 期再任）阿部美恵、石塚裕子、熊倉朗子、廣野由美子、松村豊子、矢次綾、（第 12 期着任・第 13 期再任）江澤美月、大島一彦、大嶋浩、木村晶子、小泉朝子、鈴木美津子、田中孝信、長浜麻里子、役割分担：『ギヤスケル論集』編集委員長：松村豊子、論文審査委員：阿部美恵、大野龍浩、木村晶子、鈴木美津子、多比羅真理子、廣野由美子、第 23 回大会運営委員：大会会場校：松村豊子（江戸川大学）、事務局：事務局長：諸坂成利、庶務：熊倉朗子、小泉朝子、長浜麻里子、広報：矢次綾、江澤美月、ホームページ運営：熊倉朗子、各種 ML 管理：宮丸裕二、会計監査：玉崎紀子（平成 22 年度会計より。あと 1 名を今後決める。）（以上敬称略）、編集委員長については、現委員長の任期満了に伴い、

次期編集委員長に足立万寿子氏のお名前が候補に挙がった。論文審査委員については、阿部氏、廣野氏の任期満了に伴い、次期論文審査委員に松村豊子氏、玉井史絵氏、直野裕子氏のお名前が候補に挙がった。事務局長任期満了について、諸坂氏には事務局引き継ぎのため、幹事として残っていただきたい旨、会長から提案があった。広報は矢次氏の任期満了に伴い、江澤氏が Newsletter の刊行を担当することが報告された。また『英語青年』への連絡は長浜氏にお願いし、ホームページ運営及び各種 ML 管理は、引き続き熊倉氏、宮丸氏にお願いすることとなった。3. 平成 23 年度行事予定：(1)『ギヤスケル論集第 21 号』について、松村豊子委員長より論文審査報告があった。依頼論文の査読については継続審議となった。(2) 第 23 回例会・大会について、例会手順について確認がなされた。また平成 23 年 10 月 2 日(日)、江戸川大学において開催される第 23 回大会プログラムについて検討がなされた。4. 事務局より、矢次綾広報担当より Newsletter 23 号についての報告があった。諸坂事務局長より、平成 22 年度会計報告・23 年度予算案、英国ギヤスケル協会会費についての説明があった。また会費を規約に明記するか否かについては、会則検討委員会を設立して検討していくことが承認され、委員長を矢次氏に依頼、ご快諾いただいた。また会長より企画委員会設立についてその趣旨の説明と設立提案があり、承認された。委員長は木村晶子氏にご快諾いただいた。

【平成 23 年度第 2 回役員会】

日時：平成 23 年 10 月 1 日(土) 午後 3 時 会場：日本大学法学部本館 2 階第 1 会議室、1. 入・退会、入会：佐藤実紗、長澤佳則、退会：相沢百合、植田幸江(ご逝去)、服部武子、2. 平成 22 年度会計報告、第 1 回役員会ですでに報告済みであったが、会計監査の承認を得たことがここで報告された。3. 各種委員会報告、(1)『ギヤスケル論集第 21 号』について、白紙頁のない編集をすることが確認された。(2) 日本ギヤスケル協会会則検討委員会報告、矢次綾会則検討委員会委員長より文書にて、会則「第五条(会員)」の項目に、「年会費は、一般 5,000 円、学生 1,000 円とする。」を入れる委員会報告がなされ、承認された。(3) 第 23 回大会について、大会手順、懇親会について確認がなされた。4. 役員組織と役割分担、(1) 組織と任期、日本ギヤスケル協会第 12 期役員、会長：多比羅真理子、副会長：大野龍浩、事務局長：諸坂成利、幹事：(第 11 期着任・第 12 期再任 任期は平成 24 年 3 月末まで) 阿部美恵、石塚裕子、熊倉朗子、廣野由美子、松村豊子、矢次綾(第 12 期着任・第 13 期再任) 江澤美月、大島一彦、大嶋浩、木村晶子、小泉朝子、鈴木美津子、田中孝信、長浜麻里子、日本ギヤスケル協会第 13 期役員候補、会長：多比羅真理子、副会長：大野龍浩、事務局長：諸坂成利、幹事：(第 12 期着任・第 13 期再任 任期は平成 26 年 3 月末まで) 江澤美月、大島一彦、木村晶子、小泉朝子、鈴木美津子、田中孝信、長浜麻里子(第 13 期着任) 足立万寿子、市川千恵子、閑田朋子、関口章子、玉井史絵(以上敬称略) なお大嶋浩氏は、来年度より日本ヴィクトリア朝文化研究学会の事務局長に就任されることになり、本協会の幹事は第 12 期をもって退任の希望が出され、承認された。事務局長・諸坂成利氏は、任期満了のため今期役員改正で退任される予定だったが、会長よりの再任依頼があり、役員会では、現在の協会の運営状況も考えたうえでの特別措置として諸坂氏の事務局長再任が了承され、総会での承認を得ることとなった。(2) 役割分担、『ギヤスケル論集』編集委員長：足立万寿子、論文審査委員：大嶋浩、大野龍浩、木村晶子、鈴木美津子、多比羅真理子、松村豊子、第 23 回大会運営委員：大会会場校関係者、事務局、事務局長：諸坂成利、庶務：小泉朝子、閑田朋子、長浜麻里子、広報(Newsletter の刊行)：江澤美月、ホームページ運営：熊倉朗子、各種 ML 管理：宮丸裕二、会計監査(平成 22 年度会計より)：川上真巳子、玉崎紀子 5. 平成 24 年度行事予定、(1) 第 24 回例会、日時：平成 24 年 6 月 2 日(土)、会場：日本大学法学部、(午前 11 時より役員会、午後 2 時より研究発表)(2) 第 24 回大会、日時：平成 24 年 10 月 6 日(土)、会場候補：中京大学、内容未定、この日に試験的に、役員会及び第 24 回大会を開催することが検討され、承認された。(3) Newsletter 第 24 号について、江澤美月 Newsletter 担当より、次回総頁数を記念号以前に戻したいとの提案があり、承認された。また巻頭エッセーには、閑田朋子氏を通じて Jenny Uglow 氏に原稿を依頼、その快諾が報告された。6. 事務局より、平成 23 年度予算案の提案があり、審議の結果、承認された。7. その他、(1) 研究会について、会長より、ギヤスケルの短編を中心にした研究会を開きたいとの提案があり、承認された。(2) 講演・シンポジウム講師料について、事務局長より現行の講師謝礼金の見直しについて提案があり、審議の結果、講演者 30,000 円、シンポジウム・パネリスト(学会員外の場合) 10,000 円(共に交通費は含まれない)で承認された。

【平成 23 年度日本ギヤスケル協会総会】

平成 23 年 10 月 2 日(日)、会場：江戸川大学 A 8 F 第 1 会議室、1. 平成 22 年度会計報告、および平成 23 年度予算案について、諸坂事務局長より、議案についての報告・説明があり、審議の結果、承認された。2. 各種委員会報告、『ギヤスケル論集』第 21 号について、松村豊子委員長より経過・完成の報告があった。また会則検討委員会報告につ

き、代行として事務局長より第2回役員会での上記会則変更案が提案され、審議の結果、承認された。3. 役員組織と役割分担、会長より第2回役員会での原案が提出され、審議の結果、承認された。また諸坂事務局長の任期延期についても承認された。4. 平成24年度行事予定について、第24回例会・大会共に、第2回役員会での原案が提出され、審議の結果、承認された。またNewsletter第24号について、江澤美月Newsletter担当より、第2回役員会での原案が提出され、審議の結果、承認された。5. その他、会長より研究会開催の提案、また事務局長より講師謝礼金の案が提出され、それぞれ審議の結果、承認された。

◆◆◆◆日本ギaskell協会 第24回例会の御案内◆◆◆◆

日 時：平成24年6月2日（土）午後2時から 会場：日本大学 法学部

1. 研究発表：「エリザベス・ギaskellとアナ・バーボルドの社会思想——『メアリー・バートン』を中心に」
太田 裕子（聖心女子大学非常勤講師）
2. 特別研究発表…研究会（読書会）から：「“Lizzie Leigh”——「放蕩娘」の挫折」
波多野 葉子（元筑波学院大学教授）
3. 講演：「マンチェスター美術名宝博覧会とギaskell」
松村 昌家（大手前大学名誉教授）

閉会后、会場を移して懇親会

◆◆日本ギaskell協会 第24回大会 予告◆◆

日 時：平成24年10月6日（土） 会場：中京大学

シンポジウム：「19世紀イギリス小説と都市空間」（仮題）

コーディネイター・講師：梅 正行（中京大学教授）

講師：武井暁子（中京大学教授）、木村晶子（早稲田大学教授）、

松本三枝子（愛知県立大学教授）、田中孝信（大阪市立大学教授）

講演：玉井 暉（武庫川女子大学）

●●●●●編集後記●●●●●

矢次綾先生の後任として、今回からNewsletterの編集を担当することになりました。御支援と御協力下さった先生方、特に、企画の段階から折に触れてサポートして下さった多比羅真理子先生、諸坂成利先生、校正を補佐して下さいました小泉朝子先生に、厚く御礼申し上げます。巻頭のエッセーは、在英の閑田朋子先生の御尽力で、英国のThe Gaskell SocietyのVice-Presidentであり、*Oxford Dictionary of National Biography*（2004）の“Gaskell, Elizabeth Cleghorn”の項で、日本の活動に言及して下さいているJenny Uglow先生に、お願いすることが出来ました。今回は、エッセーのトピックについてリクエストに応じます、との先生の御厚意に甘え、役員会で協議の結果、昨年の大会のテーマであった手紙について書いていただきました。Uglow先生にとつ

ても手紙は、*Elizabeth Gaskell: A Habit of Stories*（1993）のご執筆動機となる、重要なテーマであったようです。

（編集 江澤美月）

発行：日本ギaskell協会

〒101-8375

東京都千代田区三崎町 2-3-1

日本大学法学部 諸坂成利研究室内

日本ギaskell協会事務局

03-5275-8501（庶務課）

URL: <http://wwwsoc.nii.ac.jp/gaskell/>

e-mail: smorosak@law.nihon-u.ac.jp

発行日：2012年5月1日